

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

日本の亜使徒聖ニコライの聖典翻訳研究：
正教会の用語翻訳の特殊性をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2516

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



博士論文審査等報告書

1. 出願者 外国語学研究科文化交流専攻【 文化 】コース

ふりがな

氏名 インナ・ブリズナ

2. 論文題目 日本の亜使徒聖ニコライの聖典翻訳研究

—— 正教会の用語翻訳の特殊性をめぐって ——

3. 審査委員

主 査： 清水 俊行 (印)

副 査： 岡本 崇男 (印)

副 査： 金子 百合子 (印)

副 査： 佐藤 昭裕 (印)

4. 博士論文審査の要旨

インナ・ブリズナ氏は2016年に博士後期課程に入学し、昨年1年の休学を含む計4年間の研究期間を経て、この度上記の博士論文を提出した。日本の亜使徒聖ニコライは1861年の来日以来、1911年の死に至る半世紀に亘って日本ハリストス正教会の主管として、日本への正教の布教活動に人生を捧げた聖人であるが、その多岐に渡る活動の中で「聖典翻訳」は特筆すべき、宣教活動の言わば核心部分にあたるものである。『新約聖書』、『奉事経』、『三歌斎経』、『時課経』などにおける用語翻訳の特質はニコライの翻訳理念を如実に反映したものであるとする著者の主張は至当であり、かつ比較翻訳学や正教神学の方法が最大限に発揮された本邦でも前例のないきわめて独創的かつ包括的な論考は審査員全員の高い評価を得ることとなった。本件の論文審査委員会は、本論文を各方面から詳細に検討し、最終試験において質疑を行った結果、本論文は本学の博士論文に値するという共通の認識に達したことをここに答申する。各章の具体的な審査内容に関しては、別紙を参照されたい。

5. 論文成績 _____ 点 最終試験評価 _____

6. 授与する学位(付記する専攻分野)

博士()

(審査内容 別紙)

明治期の日本に正教(Orthodox church)を伝えた使徒聖ニコライが、布教活動の最重要課題と位置づけたのは「聖典翻訳」であった。ギリシャ語や教会スラヴ語訳はもちろん、日本に先んじて翻訳されていた中国語訳の「聖書翻訳」を参照しつつ、ニコライは正教の本質を聖書理解に限定せず、典礼書や祈禱書を用いた奉神礼(礼拝)の体系と信仰生活との総合的理解と実践を活動の基軸に据えていた。そのために彼は異教徒であった日本人が然るべき形式を備えた信仰生活を送ることができるように、日本人の言葉で正教的概念を正しく理解させるための翻訳活動を半世紀にわたって実践したとされている。

著者は本論文で「聖典」の中心を、ニコライが最も心血を注いだ『新約聖書』に置き、そこから派生した典礼書(『祈禱祭文』(1877-80)、『奉事経』の原型)、『時課経』(1884)、『聖詠経』(1885、1901)、『三歌斎経』(1911))に至る諸文献における用語法を比較することによって、正教的神学概念を表現するために、従来の翻訳とは異なる訳語や日本語の規範には使用例のない漢字をあてるに至った理由について考察を行った本邦では初めての試みとなっている。

本論文は、文献一覧を含む本文が229頁、第三章以降で取り上げられる「一の神(Бог един)」などの主要概念に関する新約聖書と『礼拝祈禱』『祈禱祭文』『時課経』『三歌斎経』での出現箇所の対照表をまとめた96頁の付録から成っており、総頁325頁を数える大部なものである。

第一章では、ニコライの翻訳過程を検証するために比較対象として使用した文献を個別に取り上げ、各々の特質について概説している。ここで注目すべきは、新約聖書の翻訳に際して最初に参照したのが、中国語の聖書であったことである。しかし、教会スラヴ語を最も信頼してきたニコライにとって、中国語訳の翻訳テキストは様々な点で信頼に足らぬことが判明したことで、この参考書への熱は冷め、自らの翻訳にあてる漢字をいくらか参照した程度にとどまった。しかし、その後、すでに翻訳されていた他派キリスト教の聖書にも多くの歪曲や誤謬を見出したため、ニコライはギリシャ語と教会スラヴ語、ロシア語などをもとに、全面的に翻訳し直すことを決意する。

続いてニコライによる翻訳の方法が整理される。漢学者の中井木菟麻呂を加えてなされた翻訳は次の三段階から成り立っていた。まず教会スラヴ語とギリシャ語の原書の語彙を検討し、同時に北京ロシア正教宣教師による中国語訳奉神礼の漢字をもとに、意味の違いをいかに表記するかを考察する。その意図を汲んで、中井は忠実に文章化していく。そして最終的には二人で読み合わせることで、訳語が正教の正しい教えから逸脱していないかをニコライ自身が再度チェックするというものである(ニコライの宗務院宛の報告書)。その際、ニコライの翻訳法の特徴として、教会スラヴ語の語根のひとつに対して、漢字をひとつ当てる方法を取っていることが明らかにされる(Богородица=生神女、Благословенный=福者等々)。

これらの基本的事実を踏まえて、第二章ではニコライの翻訳に関する分析方法が整理される。ニコライが用いた上記の複数聖書の翻訳を参照しながら、聖書以外の様々な典礼書類の訳語と比較検討し、ニコライが教会用語に用いた漢字と読みの特異性について厳密に精査する。そして訳文作成の過程においては、日本語の字義を様々な既成の辞書や語彙集を使って確認する。正教の教義を歪めることなく訳語に反映させるために、聖書の注釈書、とりわけ聖師父の解釈書などを利用して、その意図を解明するよう努めた点が多く事例によって確認される。さらに、一定時期を経て改訳の必要性が生じた場合、訳語の変遷を聖使徒行実に遡り、通事的観点から再考するという手段を講じていた点も指摘されている(新約聖書だけで日本滞在中に二度改訳された)。

これまではニコライの翻訳の理念的・技術的手法について総論的論考が施されてきたが、第三章からは、それが具体的な言葉に関して、現在の訳語を得るにいたる過程が論じられる。まず最初に Θεός...εἷς/μῦθος(Бог един)「一の神」を取り上げている。ここでは文脈に応じて、「唯一の神」、「獨一の神」、「一の神」、「独神」、「同一の神」、「一人」のように訳し分けられているが、一部の例外を除いて、唯一の神を表す「一(いつ、いち、ひとつ)」という漢字が含まれており、聖師父の教える「一の神」の様々な豊かなニュアンスが示される。この命名法が正教の神を定義した聖師父(福たるフェオフィラクト等)の意味を汲み取るべく考案された名前であることを著者は強調するのである(コリント84のこの言葉は「唯一の神」と訳されている)。ニコライの言葉への洞察力は もちろん、一言半句疎かにしない宣教精神が生み出す重層的な意味領域の弁別意識の鋭さは、とりわけ、「獨一」を当初は「どくいち」と読ませることを検討しながら、後に「ただひとつのみ」という意味の「獨」の文字を残しつつ、「一」を“至聖三者の三つの位格が一である”の意味を適用して「どくいつ」と読ませたことに表れているとする。これなどは教理的意味の表現を既存の国語概念に優先させた意味拡張の成功例として紹介される。同様に、「同一」では、“同じ”と“一なる”の意味を合成していながら、「唯一」については神がただ一であり、その他の神が存在しない意味を強く出すために、「唯一」を採用した経緯に倣って、「一人(един)」と読ませたのも、イイスス・ハリストスの人性を明示するために、「人(человек)」に当たる言葉を補う必要があったためと説明する。このように神の本性を表す「一」(もしくは「一」)の多義性をニコライは弁別特性として正教教義の理解に適用させていることを立証しようとする。

第四章ではさらに深遠な神学的問題を孕む論争的概念である言葉 πνεῦμα(дух)に関して、ニコライが「神」という訳語を決定するに至るまでの経緯を追跡している。日本語におけるこの「神」および「靈」の字源、「神」、「靈・靈」、「聖靈・聖靈」、「御靈」などの辞書的な意味を手がかりにしながら、ニコライは日本語の「靈」は地(土)に属し、朽ちる者(コリント前書16:47-50)であるのに対し、「神」は天上に属し、不死を継ぐ者であることを理由に、最終的にこれに「神」の字を当てるという結論に達したことを突き止めている。著者によれば、こうした経緯は、正教的な「神」の意味、つまり人間の救いという概念が、「靈」から「神」への階梯を昇ることを意味し、罪の生活から聖機密(Таинство)を通過して浄められることによって裏付けられるものであると主張する。神の恩寵が外的な論理ではなく、聖体礼儀を通じた神のエネルギーの授受と罪の生活からの変容であることを意識すれば、「神」とは πνεῦμα τῆς ἀληθείας(Дух истины)「眞實の神」のように、倫理的な「眞理」という語にはない、成長を表す果実の「眞」を生かす必要があったという説明も得心がいく。

第五章では、キリスト教の信仰の目的である「復活」の証として重要な意味を持つ Θεός ζῶν(Бог живой)「活ける神」「生ける神」、及び ἀνάστασις/ἐγέρσις(воскресение)「復生」「甦」「復活」など、揺れが見られる訳語に、各々その理由が示される。これとの関係において、「活ける水」「活ける言」「活ける石」「活ける祭」「活ける餅」の特徴についても、「復生」「甦」にはない「復活」の「活」の特性が強調される(第六章)。ニコライの翻訳においては、正教の中心的概念である воскресение「復活」及び Бог живой「活ける神」が共通の「活」の字によって結びつけられるように、信者の中で活動し、全ての人間をこの「復活」に導く「活ける眞の神」が必要であると説明している。しかも著者はこの同じ「復活」にしても、旧約の『聖詠経(詩篇)』の中では、ἀνάστασις/ἐγέρσις(воскресение)の意味が隠されているため、そこで使われる воскресни, Господи/ воскресни, Боже に「復活」を使わずに、「主よ、起きよ...」「神よ、起きよ...」が使用されるが、例えば、十字架上で釘打たれたイイス

スを見て泣き、復活の奥義を知る生神女マリアの Чудо Моє... воскресни が「我が子よ、復活して」と翻訳されるのは明らかにイイススによる新約の意味を生かそうとするニコライの翻訳理念の真価が表れていると主張している。

最後の第七章では、神への祝讃辞である εὐλογητός ὁ Θεός (Благословен Бог) / εὐλογητός Κύριος (Благословен Господь) 等が取り上げられるが、ここでもニコライは、“讚美”及び“祝福”の意味を区別している。この両者の場合、ニコライは“讚美”の意味を生かし、εὐ(благо)及びλόγος(слово)から成る εὐλογητός の各語根に「祝」と「讚」という漢字をあて、「祝讚せらるる哉神」、「祝讚せらるる哉主」と訳している。概して、新約聖書には“神を讚美する”意味を持つ動詞が多いことを鑑みて、それに応じて意味的な弁別のバリエーションを作るのである。その結果、「讚美」は αἰνέω (хвалить) に対して、もしくは神を表す特別な名称 ὁ υἱὸς τοῦ εὐλογητοῦ (Сын Благословенного) 「讚美せらるる者の子」(マルコ 14 : 61) に対して用いられた。そのため、重複を避けるために、ニコライは新しい訳語を考案した。「讚」の字を土台に、それに特殊性を表すもう一つの字を加えて「祝讚」「讚榮」「讚詠」「讚め揚げ」などの新語を生み出していったと説明している。

こうした神学的教理の解釈を含む聖書の重要概念をめぐる釈義論に基づく、ニコライの翻訳手法の分析が、博士論文審査会の審査員を惑わせ、一部に違和感を引き起こしたことは事実である。なぜなら、聖書の訳語をめぐる判断材料として、語彙を比較する方法を用いていながら、用語法を説明する論理は聖書学的な解釈論に偏っており、言語学的な意味体系化を志向していない点や、訳語選択の特殊性の意味が明確でなかったために、誤解を生み出したからであった。こうした自らが信奉する宗教の訳語を正当化し、その教義の正当性を確認するための演繹的論証は、未だ理解が得られにくいことも認識すべき点である。しかし、著者も言っているように、この研究は、そもそも正教会の主要概念を表す教会用語を取り上げ、日本人に向けて発した神の福音を正しく理解させるための手段であったのであり、そのプロセスは日本のみならず全世界で伝統的に行われてきたことであることを鑑みるならば、今後こうした研究の手法が聖言のより多くの言葉と概念へと拡張され、福音書のみならず、信仰の母体となるべき近代日本人の精神史の一端としての正教的世界観の足跡をたどるための無限の可能性を与えたと言いうる。著者が目指すニコライの聖書翻訳の解釈の試みは、他ならぬ我々が教会用語の特殊性を探るための道筋を示し、神が我々人間に教え、預言者や聖使徒、聖人らが人々に解き明かそうとした真実の神^スの意味を、日本語となった福音の言葉を介して汲み取ることを可能ならしめるものだからである。ウクライナ人であるブリズナ氏が、日本人に先駆けてこの暗示を解き明かすための一歩を踏み出したことの意味は誠に大きいと言わねばならない。

以上の観点から、ブリズナ氏の博士論文審査委員は、本論文を博士号授与にふさわしいものと認めるに至ったことをここに報告する。

審査委員 主査 清水 俊行 (本学教授)
副査 岡本 崇男 (本学教授)
副査 金子百合子 (本学准教授)
副査 佐藤 昭裕
(学外審査員 京都大学名誉教授)